



2019年12月に武漢市に端を発した新型コロナウイルスの感染拡大は、小説や映画でしか知ることのなかったパンデミックを世界中で引き起こし、今まで当たり前だと思っていた日常が大きく揺るがされた。

気候変動も著しく、今年6月の道内の月間降水量は主要観測地点全22地点で、平年を上回った。最多降水量を記録したのは、浦河町の272.5mmで平年比2.8倍。旭川市も189mmと1889年の統計開始以降最多を更新し、日本気象協会は、『いわゆるえぞ梅雨ではなく本物の梅雨に近かった』と報告し

VUCA時代に求められる医療

情報広報部副部長

寺本

瑞絵

た。ラニーニヤ現象の影響により、北へ蛇行した偏西風の影響を受け、梅雨前線が活発なまま北上したため、記録的な大雨につながったと考えられる。

世界情勢においては、ロシアによるウクライナ侵攻で、民主主義が広まりグローバル経済が進めば戦争は起きない世界になるという期待が打ち砕かれた。同時多発テロの衝撃と同様、これまでの秩序や価値観は大きく揺らぎ、世界が変化するのを感じさせた。

今、まさに『VUCA(ブーカ)時代』といえるであろう。VUCAとは、Volatility

(変動性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとった造語であり、元々は1990年代に、冷戦後の戦略が複雑化した状態を表す言葉であったが、その後、変化が激しい社会情勢を表す言葉として利用されるようになった。このVUCA時代に、我々医療はどのように立ち向かうべきなのだろうか。待ったなしで始まる働き方改革。罰則付き時間外労働上限規制が医師にも適用される。医師は聖職であり、不眠不休で患者に尽くすのが当然とされ、これまで自己犠牲的長時間労働によって支えられてきたシステムを、医師の任務に集中することにより、効率・生産性を向上し、かつ診療以外の時間の確保など多様性への対応を重視するシステムへと変換する改革であり、医師の

重要な行動指針となる。しかし、医師の働き方改革は、地域医療構想、医師偏在対策と三位一体で進むべき改革であり、現場が混乱に陥っているのは周知の事実である。

働き方改革では、タスクシフト・タスクシニアおよびICT活用による業務改善や効率化、教育や研鑽などのスキームチェンジが必要であり、ひいては最大の目的は患者へ届く医療の質を高めることとして、適応することが肝要である。

医療の質の維持と、コスト削減の手法の1つに、デジタルトランスフォーメーショ

ン(DX)が挙げられる。電子カルテ等プラットフォームの拡充やクラウド化、PHR(Personal Health Record)の利用、RPA(Robotic Process Automation)ツールやAIの導入、オンライン診療などの医療DXは今後、加速度的に広がるであろう。また、人生100年時代の到来を見据えた、疾病予防、医療・介護の基盤となるデータ活用や、AI等の医療現場における活用が推進されている。2018年には米国食品医薬品局(FDA)が糖尿病性網膜症AI自動診断システムを承認した。今や、医療AIは画像診断だけでなく、ゲノムデータ解析、テラーメイド医療やプレジジョンメディスン、創薬に至るまで様々な段階での活用が期待され、日本医師会も、医療の発展にAIは不可欠であるとの認識を示している。

最後に、先日キャリアの在り方について考える機会を得たので紹介したい。プロティアンキャリアという言葉が耳にしたことはあるだろうか。プロティアンキャリアとは、環境の変化に応じて自分自身も変化させる柔軟かつ自律的なキャリアを指し、自分のやりたいことと組織のミッションを重ね合わせつつ、心理的成功を目指すキャリアである。

社会状況が変化していくVUCAの時代には、過去のロールモデル(団塊の世代、昭和の成功体験、組織への帰属)に頼るのではなく、将来を見据えて対応し動く(組織間を超えた連携・研究体制、ダイバーシティ・インクルージョンなど)医療が必要なのではないか。現在、医師自身が広い視野を持ち、「どのような医療が必要なのか」「どのような医師が求められているのか」考え続けることが期待されている。